

一. 日本初の滑稽俳句集

稲葉純子

約百十余年前の明治三十四年に、佐藤紅緑が「滑稽俳句集」を出版した。元禄時代から明治三十年代に至る滑稽句を収録したもので、日本初の滑稽俳句集である。二百五十六人の千五百句を掲載している。

全国各地の図書館で、所蔵している所はわずかで、仮に所蔵していても貸し出しは不可である。私は手を尽くした挙句、国会図書館からデータの提供を受けることが出来た。

佐藤紅緑について

明治七年～昭和二十四年、弘前市生まれで俳人、作家、劇作家、小説家である。息子に詩人のサトウハチロー、異母妹に作家の佐藤愛子がいる。紅緑は、明治二十五年、正岡子規の門下の俳人として出発した。同時期に碧梧桐、鳴雪、牛伴等と句会で交流している。後に百四句を子規の選句と批評を受け「かりがね集」としてまとめている。時に明治三十一年十月、紅緑二十四歳、子規三十一歳である。

紅緑が「滑稽俳句集」の編集を企図したのはこの後である。推測ではあるが、紅緑を熱心に指導した子規は、俳句の革新を紅緑に期待したのではなかろうか。「滑稽俳句を集めて分類してみよう。そこから俳句革新の手がかりが得られるかもしれぬ」。紅緑は俳句研究についても子規の助言を受けているはずである。紅緑が滑稽俳句集を内外タイムス社から出版したのは明治三十四年。子規は滑稽俳句集を手にしてどのような感慨を持ったのかは不明である。滑稽俳句集出版の一年後に子規はこの世を去った。

滑稽俳句集の動機

紅緑は滑稽俳句集出版に至る動機を、その序文に以下のごとく書いている。「滑稽の振るわぬ今日に於いての危うさを何としても、不動なるものに位置づけたいとの信念に基づいている」「極小詩形の創作の俳人達の作句に滑稽句を見いだす」。

紅緑は文芸における「滑稽の不足」を嘆いていたのである。そして「短詩」で

ある「俳句」に「滑稽復興の手がかりを得たい」と思ったのであろう。

収録されている滑稽句だが、まず二百五十六名の俳人の名は、殆ど、今は目にすることがない。そして私にとって難解である。取り敢えず五句とりあげてみる。

①春の夜の撲られ損や人違ひ 笠雨

人違いで殴られた。殴られ損だ。この句に滑稽を感じるかどうか、紅緑がこの句をとりあげた理由は、わからないが、私には「滑稽」とは思えない。

②長閑さや牛の角文字よだれ文字 てつ

「牛の角文字」は「い」のことである。「よだれ文字」はどういうものか理解できない。

③櫻咲く頃鳥足二本馬四本 鬼貫

桜咲く頃の野外の情景なのだろうか。これも「滑稽」がどこにあるのか不明。

④出水の我名を人に尋ねけり 閑志

出水が季語であるが、自分の名を誰かに尋ねるとは、どのような場面か想像できない。

⑤飛ぶ蝶を喰はんとしたる牡丹哉 抱一

これは、面白い見立てである。

紅緑が「滑稽句」としてとりあげた、千五百句のほんの一部を読んだに過ぎない。抱腹絶倒句にも微苦笑句にも、今のところ出会えていない。

しかし、紅緑は、滑稽の萌芽あるものは積極的に拾いあげたとしているので、読み進めればこの時代の滑稽や紅緑の滑稽感に納得する作品に出合えるものと期待している。